

向井潤吉

民家・郷愁の満ちるところ

風景に息づくすがた

微雨（長野県木曾郡南木曾町妻籠） 1974年

2000年9月30日[土]→12月24日[日]

開館時間＝午前10時～午後6時＜入館は5時30分まで＞

休館日＝毎週月曜日＜ただし祝日と重なった場合は翌日＞

観覧料＝一般200円(160円) 大高生150円(120円) 中小生100円(80円)

65歳以上及び障害者の方100円(80円) ()内は20名以上の団体料金

世田谷美術館分館

向井潤吉アトリエ館

〒154-0016 東京都世田谷区弦巻2-5-1 TEL 03-5450-9581

大原冬に入る（京都府京都市左京区大原） 1966年



このたび向井潤吉アトリエ館では、向井潤吉先生が描いた民家作品を中心として、『民家・郷愁の満ちるところ風景に息づくすがた』展を開催いたします。

向井潤吉先生が、日本の草屋根の民家を描き始めたのは、終戦を迎えた昭和20年のことでした。

戦中には陸軍の報道班員として、さまざまな戦地に従軍しながら記録画の制作に携わっていた向井先生は、そのさなかに、戦争の実態をつぶさに肌で感じ、この虚妄で強大な暴力に蹂躪される哀れな人間の悲惨さを、いやがうえにも痛感されていました。

向井先生の心の中に、ある種の戦争に対する感慨が、徐々に形を整えはじめ、それはやがて、日本の原風景とも言える民家を含む豊かな山河、自然への想いを募らせることになったのではないのでしょうか。

戦後間もなく、疎開をされていた娘さんを迎えるために、新潟県川口村に出かけた向井先生は、その手にキャンバスを携え、民家の第一号の作品である「雨」を制作されました。

以降、向井先生の民家を求めての遍旅は40年以上におよび、数多くの民家作品が制作されてきました。

それらの作品は失われていく日本古来の草屋根の民家をキャンバスに描きとめるだけでなく、同時にその様相を急速に変貌させてきた日本各地の風土そのものを描くことになり、それら諸作品は、さまざまな意味において貴重な記録的意味をもったと言えます。

ひとつひとつの民家には、その民家の構造や機能を形成してきた土地の風土、産業、生活習慣などが染み込んでおり、それぞれに独特の生活感がたどようものです。

向井先生はそうした、民家の個性性と言えるようなものを、絵画という手法を使って周囲の自然環境をも画面にとりこみながら、記録されてきたと言えるのではないのでしょうか。

しばしば、向井先生の民家作品を鑑賞し、その感想の言葉の中に、“郷愁”という言葉を目にしますが、それは、作品が人それぞれに独特な懐郷の念を喚起させるだけの魅力を湛えているということだけではなく、草屋根の民家ゆえに宿り得る輝くいのちを、そこに感じとるからなのかもしれません。

向井潤吉 民家・郷愁の満ちるところ 風景に息づくすがた



田友侯にて(山形県東田川郡朝日村田友侯) 1963年



春塘(埼玉県川越市郊外) 1983年



北国街道白雨(新潟県西蒲原郡巻町稲島) 1975年



丹波下山の部落(京都府船井郡丹波町下山) 1969年



秋酡(福島県南会津郡南郷村) 1973年

マタギの家(秋田県北秋田郡阿仁町根子) 1963年



世田谷美術館分館

向井潤吉アトリエ館

〒154-0016 東京都世田谷区弦巻2-5-1 TEL 03-5450-9581

●最寄り交通機関のご案内

東急田園都市線【駒沢大学】駅 西口 下車／徒歩10分
東急世田谷線【松陰神社前】駅 下車／徒歩17分
東急バス(渋05) 渋谷～弦巻営業所 停留所下車／徒歩3分
東急バス(等11) 相模谷折返所～等々力【駒沢三丁目】 停留所下車／徒歩3分
東急バス(渋11) 渋谷～田園調布 【駒沢大学駅前】 停留所下車／徒歩10分
東急バス(渋13) 渋谷～砧本村 【駒沢大学駅前】 停留所下車／徒歩10分

